

# 客観主義と学派の対立

ゼロから司法試験 復習ノート / ゼロから刑法#4 / 動画: <https://youtu.be/Q7ohlUeWw10>

第1章 刑法の基礎 ④ / 動画の内容を見返し用にまとめたものです (動画には含みません)。

## 1. 対立の正体 [短答・論文共通]

同じ事件をどこから見るかで、刑法の立場は根本から分かります。たとえばAがかつとなつてBを殴り、Bが軽傷を負ったとします。客観主義は、外に現れた「殴った行為とケガという結果」を見ます。これに対して主観主義は、Aという人の「また殴りかねない危険な性格」を見ます。同じ事件でも、見ている場所が違うのです。

この一本の問い——犯罪の本質を「行為・結果」に見るか「行為者の危険性」に見るか——から、立場の全部が枝分かれしていきます。

## 2. 旧派 (古典学派) = 客観主義のルート [短答・論文共通]

旧派 (古典学派) は、客観主義へつながるルートです。人間観は**非決定論 (意思自由論)**——人は素質や環境の影響を受けつつも、最後は自分で選べる、と考えます。犯罪の本質は**客観主義**——選べたのに選んだ「行為と結果」を見ます。刑罰の意味は**応報** (悪事への報い=犯罪と均衡し、重すぎる刑は許されない) に、**一般予防** (罰することで社会の一般人を威嚇する) を加えます。責任の根拠は**道義的責任論**——自由意思で悪を選んだことへの道義的非難に求めます。

## 3. 新派 (近代学派) = 主観主義のルート [短答・論文共通]

新派 (近代学派) は、主観主義へつながるルートです。人間観は**決定論**——人の行動は素質と環境によって必然的に決まる、と考えます。犯罪の本質は**主観主義**——犯罪の本体は行為者の反社会的な危険性であって、行為はその氷山の一角にすぎないと見ます。刑罰の意味は**特別予防**——危険なその人を改善・教育し、必要なら隔離する (教育刑)。責任の根拠は**社会的責任論**——決定論を前提とすると自由意思では責任を説明できないため、危険な者に対して社会が防衛のために負わせる地位として責任を捉えます。

## 4. 対比表 (系図) [短答・論文共通]

| 軸     | 旧派 = 客観主義         | 新派 = 主観主義         |
|-------|-------------------|-------------------|
| 人間観   | 非決定論 (自由意思あり)     | 決定論 (素質・環境で決まる)   |
| 犯罪の本質 | 客観主義 (行為と結果を見る)   | 主観主義 (行為者の危険性を見る) |
| 刑罰の意味 | 応報 + 一般予防 (威嚇)    | 特別予防 (改善・教育・隔離)   |
| 責任の根拠 | 道義的責任論 (自由意思への非難) | 社会的責任論 (社会防衛)     |

## 学派の対立

| 観点    | 古典学派（旧派）         | 近代学派（新派）         |
|-------|------------------|------------------|
| 人間観   | 非決定論（自由意思あり）     | 決定論（素質・環境で決まる）   |
| 犯罪の本質 | 客観主義（行為と結果を見る）   | 主観主義（行為者の危険性を見る） |
| 刑罰の意味 | 応報＋一般予防（威嚇）      | 特別予防（改善・教育・隔離）   |
| 責任の根拠 | 道義的責任論（自由意思への非難） | 社会的責任論（社会防衛）     |

※ 人間観という1本の根から、左右に枝が伸びる「系図」（暗記する4行ではない）

図：人間観という1本の根から、4つの項目が左右に枝分かれする系図。

系図の読み方は、人間観（選べるか／決まっているか）という一本の根から、下の各項目が全部反対へ流れていく、という点にあります。

### 5. なぜ純粋な新派は退いたか〔短答・論文共通〕

主観主義を徹底すると、「危険な性格だ」というだけで、まだ何もしていない人を罰しかね

ません。これは #3 で見た自由保障機能（やっていないこと・書いていないことは罰しない）と真っ向から衝突します。この一点で、純粋な新派は支持を失いました。

### 6. 通説＝相対的意思自由論〔論文〕

通説は相対的意思自由論に立ちます。これは、人は素質・環境による制約を受けつつも、最後は主体的に自己の行動を決定する自由意思を有する、と考える立場です。

★ 通説の定義（答案で使う）

**相対的意思自由論**：人は素質・環境による制約を受けつつも、最後は**主体的に自己の行動を決定する自由意思**を有すると考える立場。→ 犯罪の本質は外部に現れた**行為と結果**にあるとする**客観主義**が基本。

→ 刑罰理論は折衷（応報を基礎に一般予防＋特別予防的配慮）

図：答案で使う通説の定義カード。

ここから、犯罪者を特別視する主観主義は採れず、犯罪の本質は外に現れた**行為と結果**にある＝**客観主義が基本**、という帰結が導かれます。刑罰理論は折衷——応報を基礎に、一般予防に加えて特別予防的な配慮（改善・教育）も行います。

## 7. 論争は終わっていない〔論文〕

客観主義の中でも、違法性の本質を**行為無価値**（行為を重く見る）と捉えるか、**結果無価値**（結果を重く見る）と捉えるかで、なお立場が割れます。この対立は #20 違法性総論で本格的に扱います。

### 短答ひっかけ

- 客観主義＝行為・結果を見る／主観主義＝行為者の危険性を見る。対応を逆にしない。
- 系図は人間観が根。旧派＝非決定論→客観主義→応報＋一般予防→道義的責任論／新派＝決定論→主観主義→特別予防→社会的責任論。一段でも取り違えると全部ずれる。

- 純粋な新派が退いた理由＝「まだ何もしていない人」を危険性だけで罰しかねず、自由保障機能と衝突するから。
- 通説＝相対的意思自由論。客観主義が基本・刑罰理論は折衷（応報を基礎に一般予防＋特別予防的配慮）。「客観主義＝応報だけ」ではない。

### 今日の地図（保存版）

- 対立の根＝人間観（選べる／決まっている）。ここから全部が枝分かれ
- 旧派＝客観主義（非決定論・行為と結果・応報＋一般予防・道義的責任論）
- 新派＝主観主義（決定論・行為者の危険性・特別予防・社会的責任論）
- 純粋な新派は自由保障機能と衝突して退場
- 通説＝相対的意思自由論→客観主義が基本＋刑罰は折衷
- 送り：行為無価値／結果無価値 → #20／罪刑法定主義 → #5

次回は第1章⑤「罪刑法定主義」。客観主義・自由保障を制度で支える刑法の大原則を扱います。